たかさご史話60

～一茶の高砂来訪～

小林一茶は、文化文政期の代表的な俳人ですが、西国を旅して播州を訪れていることを知る人は多くありません。彼は、寛政四年に西国行脚に出発し、九州、四国を廻っています。そして寛政七年、伊予松山を訪れた後、丸亀、岡山、姫路を経て大坂へ出ました。この間のことは『西国紀行』に書き留められており、一茶が播磨、摂津に来て名所旧跡を廻っていることがわかります。

寛政七年三月十三日の記事は次のようなものです。

十三日、姫路の城を通る。書写より一里也。先づ音にきく名城を見て

（句欠）

豆崎より高砂、曽根の別れ道に赴く。曽根の松、こは菅公の植給ふと。惜しい哉、片枝かれてあれば、

世の人に
見よと枯れたか松片枝

散松葉
昔ながらの掃除番

是より半道ほど、石宝殿に参るに、高二丈六尺、方三間半ありとなん。是や大己貴の石屑投げ給ふ石と也。うへに松二三本生えたり。

十かへりの
花いくかへりの石室かよ

是より一里、野渡をわたりて、高砂、布舟に泊まる。相見。

先づしるき
前の池哉さくら哉

十四日、逗留、歌仙の会あり。

一茶は、姫路城を見た後、豆崎を経て曽根天満宮へ行きました。そこで、有名な曽根の松が半分枯れているのを惜しみ、句を詠みました。そして、石の宝殿を見に行っています。宿を求めたのは、田中布舟宅でした。布舟は、通称、鍵屋左太夫という酒造家です。俳諧は、加古川の青蘿に入門していました。住まいを暮桜亭と称し、一茶はそこで三泊したのでした。なぜか姫路城では句を詠んでいませんが、曽根天満宮や石の宝殿での句はあります。句については、次号に。

（市史編さん特別執筆者　富田志津子）

▲　曽根天満宮の五代目の松